

鎌倉北条氏列伝（一）北条時政

長 又 高 夫

出自について

鎌倉北条氏の家紋は「三鱗」^{みつうろ}（次頁写真の北条時政像の烏帽子に付いている家紋）であるが、その家紋にまつわる逸話
が、『太平記』（巻第五「時政参籠榎島事」）に見えている。その逸話とは次の様なものである、すなはち北条時政が子
孫繁栄を祈り、江島神社^{えのしま}（神奈川県藤沢市）に参籠^{さんろう}した所、満願成就の日^{まんがんじゆう}に弁財天が現れ、前世の善根（法師として法
華経供養を行ったこと）により、七代に渡り、「日本の主」となる事を告げると、大蛇に姿を変え、三つの鱗だけを遺
して海中に消え入ったという（時宗の嫡男貞時^{ときむね}が七世代目で、八世代目の高時^{たかとき}のとき幕府は滅亡する）。そこで時政は、そ
の三つの鱗を家紋としたという話である。鎌倉時代の初めに文覚^{もんかく}に命じて江島に弁財天を勧請^{かんじよう}させたのは娘の政子で
あるとも言うし、時政自身もその菩提寺願成就院^{がんじゆういん}の浄土庭園に弁財天を奉祀^{ほうし}した事から考えると（池の中島に「池島
神社」として祀っている）、時政の弁財天信仰を知る誰かがこの説話を創作したのかもしれない。

右の三鱗伝説は、時政の子孫の繁栄を龍神が約束したというものであった。その子孫の家系については史料も残っ
ておりわかっているのだが、時政より前の世代の事については実はよくわかっていない。『吾妻鏡』^{あづまかがみ}治承四（一一八

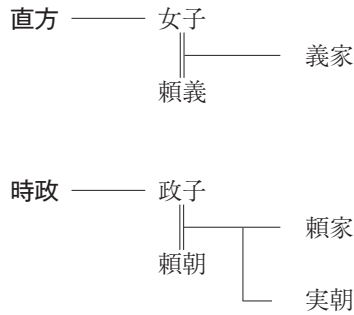


北条時政像（願成就院所蔵）

結びつけられた可能性を指摘しておられる（その祖父時家が養子に入ったとする説が有力？）。また氏は、伊勢・伊賀方面に縁故があることから、時政の出自は実は伊勢平氏であったのではないかと推測されている。なぜ時政が直方の子孫とされたのかといえは、それは頼朝と東国の豪族達が、河内源氏の嫡流頼義の東国滞在期（十二世紀半ば）を東国の黄金時代と考えていたからであろう。頼義は、相模守・武蔵守・下野守などを歴任し、東国武士の多くを被官化し、河内源氏の東国進出を決定づけた。北条氏にとって重要だったのは、その頼義の岳父が平直方であったという点である。源頼義は、直方から譲られた鎌倉の屋敷を本拠とし、同地に源氏の氏神^{うじがみ}石清水八幡宮（頼朝の代に鶴岡八幡宮へ発展する）を勧請し東国支配を固めたという輝かしい歴史がある。つまり頼朝が源氏の東国支配の淵源を先祖頼

○）年四月二十七日条に「上野介平直方の五代の孫、北条四郎時政主は当国（伊豆）の豪傑なり」と記されていることや、比較的信頼のおける中条家文書「桓武平氏諸流系図」をはじめ、北条氏諸系図が北条氏を直方系（直方とは、鎮守府將軍平貞盛の二男維將の孫である）としていることから、当時からかく信じられていたようではある。しかし、野口実氏は、時政の父祖が東国と関わりがあったことを示すのは系図上だけの話であり、北条氏が伊豆に土着するのも十二世紀に入ってからのもっとも可能性もあるとされ、強引に直方系に

直方、時政両者と河内源氏との関係



義に求めた様に、時政は、頼義の岳父直方と自分をオーバーラップさせることで、自らの政治的な立場を主張したのである。頼義と頼朝、直方と時政、直方女と政子、義家と頼家を等置させ、北条氏と河内源氏との縁を説明したという野口氏の説明には説得力がある。

もし仮に、時政が本当に直方の子孫であったとしても、時政は、ただの田舎侍ではなく、都の情勢に明るい在庁官人（国衙行政の実務に従事した地方官僚）であった。時政の本拠地は伊豆国田方郡北条郷で、狭小な所領であり、頼朝挙兵時に参じた関東の有力豪族三浦、千葉、上総氏などと比較するとかなり見劣りがする。しかし、北条氏の居館は、伊豆の国府にも近く、当時のメインルートである下田街道添いで、しかも裏手には狩野川も流れており、物資運搬の為に水運を利用することも容易であった。また狩野

川を渡り、駿河方面を西に向えば、三・五キロ程で駿河湾に出られ、海路も利用出来た。室町期に堀越公方が関東支配の為に東下した際に足止めをくい、この北条館跡地に重なるように御所を置いたのも、ここが交通の要衝であったことを物語っている。時政がこの様な交通至便な地に屋敷を構えることが出来たのも、彼が在庁官人であったからであった。北条氏館の遺構は、十二世紀中頃から十三世紀前葉までのもので、十二世紀中頃に北条氏が土着した可能

鎌倉北条氏列伝(一) 北条時政(長文)

性をにおわせる。その遺構からの遺物としては、青磁・白磁・青白磁・陶器類などの貿易陶磁や、儀礼・儀式に用いる京都系かわらけ(土器)等が大量に出土している。京都系かわらけは、京都・鎌倉との文化交流が盛んな地域で出土するものであるが、北条氏館跡からの出土品は、时期的に見て鎌倉や他の東国先進地域に先行しており、時政が挙兵以前から都との交流が密であり、在庁官人の立場を利用して富を蓄積していたことが窺える。頼朝政権が安定期に入つた文治二(一一八六)年頃、時政は、菩提寺願成就院を館に隣接して建立し、奈良仏師運慶に本尊とする仏像三体(阿弥陀三尊・不動明王・毘沙門天)の造立を依頼している。願成就院は、宇治の平等院、平泉の毛越寺、鎌倉の永福寺に比するような立派な臨池伽藍寺院であり、時政の財力を示すものである。奈良仏師への仏像造立の依頼は、頼朝の菩提寺として鎌倉に建立された勝長寿院の「丈六阿弥陀如来像」の像造を成朝に依頼したのが最初で、次がこの願成就院であったが、奈良仏師の関東下向も北条氏の人脈を通じて要請された可能性が高い。運慶は、願成就院の仏像を完成させると、続けて幕府の重臣和田義盛の菩提寺浄楽寺の阿弥陀三尊像・不動明王像・毘沙門天像の造像に向っている(仏像の構成が願成就院と同じである点に注意)。恐らく和田義盛から懇願された時政が、続けて運慶に依頼したのであらう。

時政が都に太いパイプを持っていたことについてはその他にもいくつか徴証が得られる。時政の甥時定も時政の任官前から京官(儀仗・左兵衛尉・左衛門尉)を歴任していたことがわかっているし、時政自身も池禅尼の姪にあたる中流貴族出身の女性(牧ノ方)を後妻に迎える環境をもっていた。牧ノ方の父牧宗親は、平忠盛(清盛の父)の正室池禅尼の弟であり、平頼盛領駿河国大岡牧(沼津市)を知行していた。大岡牧は、三島の西隣で北条からも近く、やはり流通の要所であり、都の文化が開花していた場所であった。時政は大岡牧を介して人や文物の一層の交流

を図ったではないだろうか。また鶴岡八幡宮の供僧ぐそうを選任する際には山門派さんもん（比叡山）の僧を時政が推薦しており、時政に独自の人脈があったことがわかる。そして何より注目されるのは、文治元（一一八五）年に時政が、いわゆる守護・地頭設置の勅許を得るために上京し、単身で朝廷側と折衝した事実である。この交渉は、いうまでもなく今後の頼朝政権の行方を決定づける大事なものであった。朝廷側の窓口となつてゐる院の近臣吉田経房は、かつての時政の上官（伊豆国国司）であり、時政が経房の人となりを理解していたことが選任された理由かもしれないが、時政が朝廷の内部事情に精通していたからこそ、物怖じせず公家達と渡り合うことができたのであろう。

鎌倉幕府草創期の時政

長女政子と頼朝との縁組みによつて、北条一門に繁栄がもたらされたことは周知の事実であるが、この縁組みは時政にとつて一擲乾坤を賭したものであった。時政自身も伊東祐親の娘を前妻に迎えている様に、本来であれば、伊東氏や狩野氏等の近隣の有力豪族の子弟と婚姻させ、在地勢力の結集を図るのが無難な選択であった。実は相模国の三浦義村も伊東裕親の娘（つまり時政前妻の姉妹となる娘）を妻としていたという説もあり、この地域での婚姻ネットワークが窺えよう。しかし時政は敢えて平氏から監視を命ぜられていた流人の源頼朝を政子の婿に選んだのである。おそらく平氏全盛期であれば、平氏一族やその家人を婿に選んで平氏政権の一翼を担う立場を鮮明にしたはずである（たとえば『源平盛衰記』では、当初時政が伊豆国目代山木兼隆を婿に選んだとするが、山木の伊豆国下向は治承三年のことであり時期が合わない）。反平氏の立場を表明することは大変なリスクを負つたのである。伊東祐親が我が娘と頼朝との仲を知り、その関係を強引に引き裂いたのも、当時の駿河から北伊豆、西相模にかけての勢力関係を考えれば当然であつ

た。その伊東氏は平氏に追随していたし、駿河国は平宗盛の知行国で目代橘遠茂が勢力を誇っていた。また西相模の有力豪族波多野義常や大庭景親等も平氏の家人としての立場を鮮明としていたからである。しかし時政は、独自のネットワークを駆使することにより平氏政権の雲行きが怪しくなり始めてきたことを知っていたのである。おそらく牧氏を通じて、平氏の内部情報入手していたのであろう。ちょうどこの頃（治承元年）都では平氏打倒をもくろむ院の近臣達の謀議（鹿ヶ谷事件）が発覚するなど、平氏の専横に対する不満が高まってきていた。治天の君である後白河院と平清盛との関係も冷え切って一触即発の状態であった。また東国に目を転じて、南関東にはかつての義朝（頼朝の父）の家人で、源氏の再興を願い、頼朝にコンタクトをとる有力豪族や、平氏政権に不満をもつ豪族達も少なからずおり、もし、これらの勢力を結集することが出来れば、奥州平泉の藤原氏のように、東国に独自の勢力を築くこともできると時政は考え始めたのであろう。仮に全国的な規模で打倒平氏の旗が揚げれば、その血筋から言っても頼朝がその盟主となり得る存在であるという確信も時政にはあったはずである。だがその為には、甲斐源氏や北関東の河内源氏庶流（足利・新田）の協力が不可欠である事も時政は十分承知していたはずである。

その後の情勢は時政の予測していた通りに進んだ。治承三（一一七九）年十一月、平清盛がついにクーデターを起こすと後白河院を幽閉してしまった。これによって畿内の有力寺社は挙って反平氏運動を勃発させ、都では後白河院の第二皇子以仁王が東海・東山・北陸道の武士達を糾合し平氏を倒そうとしていた。このとき以仁王が挙兵を促す為に諸国へ発した令旨は伊豆国にもたらされている。

時政は、まずは伊豆国内で頼朝の挙兵に賛同する豪族達を結束させると共に、相模国の三浦氏や上総国の上総氏、下総国の千葉氏といった関東一円の有力豪族にも挙兵を促したはずである。関東にもたらせた以仁王の令旨は、時政

にとつてまさに値千金の「錦の御旗」^{にしきのみはた}となったのである。

ところが、時政にとつて誤算だったのは、以仁王の乱が未然にあつてなく鎮圧されてしまったことである。しかも危機感を抱いた平氏は、以仁王に呼応した反乱分子を尽く追討するという方針を直ちに下した。この決定にもとづいて、平氏方人となっている東国の源氏に対しても出兵命令が下された。そして頼朝のもとへも、相模国の豪族大庭景親率いる追討軍が下されることとなった。時政にとつては、まだ兵力も整わぬ準備段階で、追討軍を迎え討たねばならぬことは大誤算であつたが、追い込まれた頼朝軍は、治承四（一一八〇）年八月、ついに伊豆国目代山木兼隆邸に夜討（夜襲）^{ようち}をしかけた。本来であれば源氏の旗揚げとして初戦は華々しくありたいと考えたはずである。だが余りに兵力が少なかった為に夜討という形でしかスタート出来なかつたのである。その後、頼朝軍は相模国方面へ向かい、三浦氏や和田氏の軍勢と合流しようと試みるが、大場景親率いる追討軍に行方を阻まれ石橋山の戦いで惨敗する。このとき時政は嫡男宗時^{むねとき}を戦死させてしまう。戦場から抜け出た時政・義時親子は、箱根山中で頼朝と参会すると直ちに甲斐源氏のもとへ援軍要請の為に向かうとしたが、頼朝の安全の確保が優先すると考えた時政は引き返すと、頼朝に同道し、真鶴岬^{まなづるみさき}から海路安房国^{あわのくに}に渡る。海上で三浦の軍勢と合流し兵力を整えた頼朝軍は、その後、上総氏や千葉氏の軍勢とも合流しながら上総国、下総国へと進軍し勢力を膨らませてゆく。頼朝軍が上総国へ進軍するのを見届けると、前途の不安を解消させた時政は再び甲斐国へ進発している。時政が危険を顧みず、何度も甲斐国へ赴かんとしたのも平氏方の東征軍を迎え討つ為には、甲斐源氏の協力が不可欠であることを確信していたからであらう。その後、頼朝軍はさらに武蔵国・相模国へと進み、彼らの故地、鎌倉へ入り、南関東を一応支配下におさめる。

一方、時政はその後、甲斐源氏と行動を共にした。甲斐源氏の率いる甲斐国・信濃国の軍勢は駿河国へ南下し、鉢

田合戦で平氏方の駿河国目代橘遠茂の率いる駿河・遠江連合軍を撃破する。平氏が期待していた現地の主力部隊を壊滅させた上で、平氏の東征軍を迎え撃つ準備をしたのである。その後、西進してきた頼朝軍に合流すると東征軍を富士川で向い撃ち、これを敗走させる。この一戦で平氏軍が大敗したことで戦況は大きく変化する。これまで状況を伺っていた近江国・美濃国、尾張国の諸源氏も一斉に蜂起したのである。頼朝は、遠江国・駿河国の守りを甲斐源氏に任せることで、関東一円の平定に専念することが出来るようになった。甲斐源氏との同盟関係はやはり頼朝にとつてなくてはならないものだったのである。

頼朝軍は、相模石橋山での敗戦の後、伊豆国から安房国へ渡り、上総国、下総国、武蔵国、相模国へと進軍したが、これは大敗を喫した為にやむなく選択されたルートであつたわけではなく、挙兵前から計画されていた侵攻ルートであつたと思われる。北関東で威を張る同じ河内源氏の諸氏（木曾、新田、足利）が頼朝に同調するかどうかかわからない段階では、三浦・上総・千葉の軍勢を加えながら南関東を進軍することが一番リスクが少なかった。西の守りを甲斐源氏に任せ、このルートで関東を制圧するという計略を立てたのはやはり時政であつたに違いない。

頼朝は時政だけではなく、京下りの大江広元や三善康信を側近として、後白河院と折衝を進め院の動向を伺っていた。そんな中、東国に留まる頼朝を尻目に平氏を西走させ北陸道から入京したのは頼朝の従兄弟、木曾義仲の軍勢であつた。しかし粗暴な振る舞いによって義仲が後白河院の信頼を失うと頼朝に対する期待が高まっていた。寿永二（一一八三）年十月ついに頼朝は本位に復することに成功する（つまり罪人ではなくなる）。そしていわゆる寿永二年十月宣旨によって、東海・東山・東海道地域の国衙在庁に対する軍事指揮権を認められる。頼朝軍は十月宣旨を掲げて上京し、まずは義仲を討伐すると、さらに平氏追討宣旨を得て、一ノ谷、屋島、壇ノ浦の合戦と転戦しついに平氏を滅ぼ

したのである。

文治元（一一八五）年になると頼朝の権力が増大することを恐れた後白河院は、頼朝の代官として在京していた弟の義経や叔父行家を籠絡し、兄頼朝に対し反乱を起こさせる。頼朝は自ら大軍を率いて西上しようとしたが、義経が都から落ち延びたことを聞くと、北条時政に千余騎の兵をつけて上京させる。頼朝は、時政を単なる軍事司令官として派遣したわけではなく、頼朝の代官として朝廷との交渉に当たらせる為に派遣したのである。頼朝追討宣旨を下した責任を朝廷に追及し、優位な立場から強力な権限の付与を朝廷に要求するのが時政の使命であった。いわゆる「守護（惣追捕使）・地頭」の勅許を得ることがその目的であった。諸国に「守護・地頭」を置く構想は早い段階からあったはずであるが、『吾妻鏡』は大江広元の発想であるという）、勅許を得る機会を頼朝側は窺っていたのである。朝廷が頼朝追討宣旨を下した今こそがその好機であった。東国からでは後白河院をはじめとする朝廷の出方がわからないので、時政に全権を委任してこれにあたらせていたのである。時政は経房を窓口として後白河院と交渉を開始するが、後白河院が弱腰とみた時政は、義経の追捕と治安維持を名目として、五畿内・山陰道・南海道・西海道に惣追捕使と国地頭を置くことを認めさせたばかりか、その活動を助ける為に、莊園・公領を問わず、反別五升の兵糧米を徴収する権限までも認めさせてしまったのである。この後、時をおかずに頼朝が議奏公卿の任命等、朝廷人事の刷新を書状で申し入れているのも、朝廷側の弱気な対応を肌で感じた時政からの報告を受けて実行されたことであった。

ところで時政は京都守護として都とその周辺地域の治安維持にも当たっていた。時政は、都で群盗十八人を捕縛すると検非違使庁に引き渡さず、直ちに六条河原で首を刎ねている。これを武断的な行為と評価するむきもあろうが、むしろ逆に検断行為を苦手とする時政だからこそこのような処分を敢えて行ったのではあるまいか。治安が乱れてい

る都において厳しすぎる公開処刑を行ない、人々を震え上がらせることで犯罪抑止をもくろんだのであろう。時政は、公家達に対しては、「公平を思い私を忘るる」（『玉葉』）という態度で接したのである。

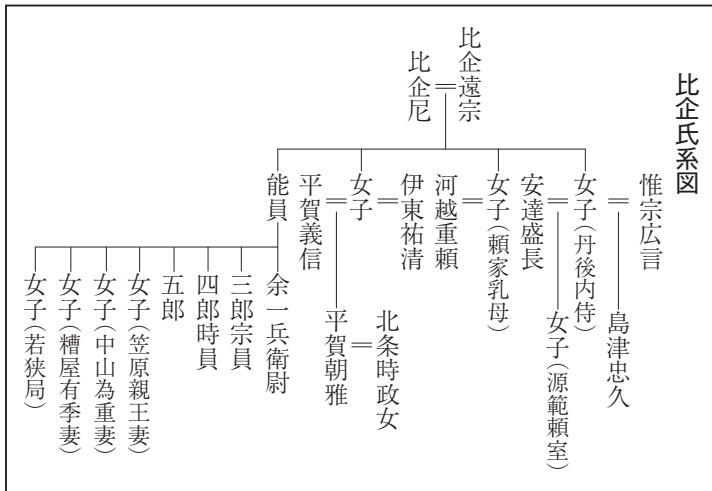
朝廷とわたりあい、守護・地頭の勅許を獲得した時政の名声は高まったはずである。ところが、翌文治二（一一八六）年に京都守護の役割を終えて、鎌倉に戻ってからの時政の行動は目立たなくなる。朝廷との交渉も時政に替わって一条能保（頼朝の同母妹の夫）が担当することになった。頼朝と時政の間には、すきま風が吹きはじめていたのである。文治五（一一八九）年に頼朝は最後の仕上げに奥州藤原氏を討滅し日本全土を平定する。そして頼朝は、権大な

納言、右近衛大将、征夷大將軍と順調に昇進をとげ、それに見合うよう政務を行なう為の政所の組織を整備してゆく。すでに以前から侍所（御家人を統括）と問注所（訴訟を管轄）は設置されていたので、これによって鎌倉幕府

の屋台骨が完成していった。しかしそれらの役所の長官職に時政の名はなかった。また頼朝が自らのブレーンに選んだのも源氏一門であり、時政ではなかった。頼朝は、源氏一門を「門葉」として五位の位階に推挙し、將軍家知行国の国守にしていた。一方、平姓の時政は、「侍」身分に留められ、国守になることも許されなかった。頼朝と時政の確執について、都における時政の独断専行的振る舞いが頼朝の不興を買ったという見方もあるが、おそらくそうではあるまい。剛胆で抜け目のない時政に対し、頼朝が警戒感を強めたというのが真相であろう。

時政は、荒々しい板東武者とは性格を異にしており、挙兵前から頼朝の参謀的な役割を担ってきた。それは挙兵以来、協力関係を得なければならない武将や公家達を婿に迎え、婚姻ネットワークを広げているその手法からも窺えよう。前妻との間に生まれた女子を、頼朝の弟阿野全成、源氏門葉の足利義兼、秩父一族を代表する畠山重忠に嫁がせ、牧ノ方との間に生まれた女子を公家の三条実宣、坊門忠清、源氏門葉の平賀朝雅、御家人の稲毛重成、宇都宮頼

綱等に嫁がせている。平氏方の動向のみならず後白河院の動靜を注視しながら、関東を平定し、果ては守護地頭の勅



比企氏系図

白河院の動靜を注視しながら、関東を平定し、果ては守護地頭の勅許まで勝ち取るその手並みは実に見事であった。頼朝は、時政の政治手腕を見ながら、若い頼家が老獪な外祖父時政の操り人形になつてしまのではないかという危機感を徐々に募らせていったはずである。源氏一門を將軍家のブレーンとし、頼家の身の周りを頼朝の乳母の家である比企氏の一族関係者で固め、さらには忠臣梶原景時を頼家の乳母父に加えているのも時政を警戒してのことであつた（頼朝は武勇で名高い甲斐源氏の加々美遠光を頼家の後見役にしようと考へていたふしもある）。頼朝の乳母比企尼には、養子比企能員をはじめ、婿として源氏門葉の平賀義信や安達盛長などがおり、その一族は武蔵国北部に勢力を誇つていた。比企一族は北条氏とわたりあえる有力豪族だったのである。頼朝は、頼家の妻も比企能員の娘（若狭局）から選んでいる。

また頼朝が、時政の子江間義時を特にこの頃から重用し始めるのも実は時政を牽制する意味があつたはずである。時政は前妻との間に、宗時、義時、時房の三人の男子をもうけていた。長子の宗時が嫡子であつたが、石橋山の戦いで戦死していた。その後文

治五（一一八九）年、後妻牧ノ方と間に政範が誕生すると、時政はこの政範を新たな嫡子とする。政範の異母兄義時は、分家江間氏の当主となったのである。『吾妻鏡』に載せるエピソードなどをみても義時は、これまでも父時政と対立する事が多かったようであるが、父が自分を差し置き、年若い政範を嫡子としたことに憤懣やるせない感情をもつたはずである。そこに目をつけた頼朝は江間義時を自らの側近（＝「家子」）として彼を遇したのである。この様に理解すれば、頼朝が義時の妻に比企朝宗（能員の父掃部允遠宗の弟？）の娘を配した意味もわかつてこよう。頼朝みずからが義時の長子泰時の烏帽子親となり、三浦氏との縁組みを決めたのも、江間家を取り立てようとする頼朝の狙いがあつたはずである。

頼朝との確執が深まった時政は、文治年間頃に頼朝から与えられたと思われる伊豆国・駿河国守護職をもとに在地での勢力拡大を図る。駿河国守護職は、甲斐源氏の反逆により時政に転がりこんできたものであるが、これも時政が暗躍した疑いが強い。時政は、頼朝と正面からぶつかる事を避け、頼朝の動向を窺っていたのであろう。

建長六（一二五四）年に橘成季が著した説話集『古今著聞集』には、伊豆の北条館近くの守山で時政が頼朝と共に狩りを催した際に交わしたとされる連歌が載せられている（巻第五、和歌第六）。時政の上の句は次のようなものであつた。

もる山のいちごさかしく成にけり

時政は、頼朝を「守山のいちご」に喩えて、自らが庇護したからこんなに立派になったのだと歌ったのに対し、頼朝は、次の様に下の句を続けた。

むばらがいかにうれしかるらむ

頼朝は時政への感謝を示さずに、「むばら」と「乳母等」とをかけ、成長した自分を見て、乳母たちが大変喜んでくれている、とはぐらかしている。この連歌が交わされた時期は不明であるが、頼朝と時政との心の隔たりを示すものとして興味深い。

頼朝と時政との関係に溝が生じるなか、建久四（一一九三）年に頼朝が富士野の大巻狩りを催した際に伊豆国の曾我十郎・五郎兄弟が、父河津裕泰の敵として工藤裕経を殺害するという有名な事件が起こる。父祖の間の相続問題にからむもので、単なる仇討ちならば、ここで問題とすべきことではないが、工藤裕経を討ち取った後、二人の兄弟は、頼朝の陣営に切り込み、頼朝の殺害までも企てているのである（勿論未遂に終わる）。ところが彼らに頼朝を討たねばならぬ積極的理由はない。実は曾我兄弟は、時政にとって前妻の甥に当たり烏帽子子でもあった。二人は常日頃から時政の館に出入りを許されており、時政から庇護されていたのである。三浦周行氏は、この事件の黒幕が北条時政であったと看破しておられるが、確かに曾我兄弟が、時政からそのかされ、頼朝殺害を企てたと考えた方が合点がゆく。この巻狩の準備も、伊豆・駿河両国の守護である時政が行っていたものであった。この事件の直後に頼朝の弟範頼が陰謀を企てたとして殺害されていることからすると、時政は、鎌倉殿の首を据え代えてしまおうと画策したのかもしれない。もしそうであるとすれば、この時点で既に時政は、鎌倉殿の傀儡化を企てていたことになる。

頼家・実朝将軍期の時政

頼朝が建久十（一一九九）年正月に逝去すると、時政は年若い十八歳の二代将軍頼家に容赦なく牙をむけるようになる。頼家は父頼朝が敷いたレールに乗り将軍親裁を行おうとするが、時政はそれを許さなかった。正月に父の遺跡

を繼いでから僅か三ヶ月後、頼家は直接訴訟を裁断することを禁じられてしまったのである。今後は、北条時政、江間義時、大江広元、三善康信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、安達盛長、足立遠元、梶原景時、二階堂行政等の御家人十三名で合議を加え、その結果を將軍家に奏上することになったのである。この制度を勘案したのが時政であつたことはほぼ間違いない。注目されるのはこのメンバー構成である。まず第一に気がつくことは、源氏「門葉」が一人もいないという事である。重臣幕閣の中に「門葉」がいないというのは、頼朝の「門葉」重視の方針を否定するものであつた。また、幕府の政務機関の長官・次官（大江広元、二階堂行政、三善康信、梶原景時、和田義盛）や親頼家派（比企能員、梶原景時、安達盛長）をバランス良く配しているという点も見逃せない。時政は、「門葉」偏重をはじめとする頼朝晩年の独裁政治の弊害を訴え、「侍」層の結束（＝共和体制の樹立）を提唱したのである。権謀術数に長じた時政は、比企一族までもこの運動に巻き込むことよつて、十三人合議制という新たな政治体制を樹立させたのである（この十三人の中に義時の名があるという事実は看過出来ない。胸底を見透かされない様に周到に人選がなされたはずなのに、時政の他に義時の名があるという事はやはり、義時が庶子家の当主であつたことの徴証となりうると思われる）。ただし血氣盛んな頼家は、これを肯んじただけではなく、小笠原長経、比企宗員、比企時員、中野能成等を近習として側におき、彼らに特権を与えることで、宿老達に対抗しようとしたのである。

時政は、翌正治二（一二二〇）年正月一日、塀飯沙汰人を勤めることで、ついに幕閣のトップに上りつめたことを内外に示した。年始めに行われる歳首の塀飯は、鎌倉殿と御家人達との主従関係を再確認するものであり、御家人の地位ランキング一位から三位までの三人が、一日から三日までの沙汰人（主催者）を順次勤めた。頼朝期においては千葉、足利、三浦、小山、宇都宮といった東国の豪族領主層が塀飯沙汰人を勤め、時政にはチャンスがなかったが、

新体制に移行すると、元日の塊飯沙汰人を勤めるまでにその政治的地位を高めていたのである。彼の實力は、この年の四月に従五位下遠江守に昇進し、源氏「門葉」と同格になっていることから窺えよう。時政は、力を蓄えながら対立する頼家を徐々に追ひ詰めてゆく。頼家の第一の郎党と呼ばれる梶原景時を計略により追ひ落としたのはその序曲であつた。景時の不正を糾弾する御家人六十六人の連署からなる彈劾文を作成させ、景時をまず鎌倉から追放し、駿河で一族共に殺害したのである。若い頼家には、時政の周到な狙いが読めなかつたのであろう。

ただし、頼家も時政をはじめとする宿老達の言いなりになっていたわけではなく、宿老達に掣肘せいちゆうを加えるべく、頼朝以来の恩賞地の面積で五百町を越えるものを没収し、近臣たちに分与する計画を立てた。頼家はその準備の為に日本全国の土地台帳たる大田文おたふみを使って調査まで開始したのである。これが宿老達の勢力削減と鎌倉殿の権力強化の方策であることは明らかであつた。しかしこの恩賞地没収策は、時政のみならず他の宿老達からも猛反発に遭ひ断念せざるを得なくなる。御家人領の保護は、鎌倉殿にまず求められることであつたので、御家人達から鎌倉殿としての適性を問題視する声すら上がったはずである。時政は、このような御家人達の不満を拾いながら、専制指向の頼家を批判したはずである。

時政は、頼家を鎌倉殿の地位から引きずり下ろし、娘の阿波局あわつぼねが乳母である弟の実朝さねともを擁立せんと暗躍し始める。この動きを察した頼家は、実朝の乳母夫である阿野全成（頼朝の弟）を謀叛のとがで誅殺してしまう。頼家側は、全成の妻である阿波局も追捕しようとするが、姉政子が身を挺してこれを拒んだ為、事なきを得る。幼い実朝の乳母夫には時政が新たに就任し、頼家と時政との関係はますます陰悪なものとなっていく。

建仁三（一二〇三）年七月に頼家が病に倒れると、時政はその機会を逃さなかつた。頼家が危篤おちいに陥つたとして、

將軍家の遺跡についての評議を開催し、強引にその相続方法を取り決めてしまったのである。それは比企能員の娘、若狭局を母とする六歳になる頼家の嫡男一幡^{いちまん}に家督を継がせ、日本国惣守護職と関東二十八ヶ国の地頭職を相続させるが、十一歳の実朝にも関西三十八ヶ国の地頭職を相続させるといふものであった。鎌倉殿の権力基盤を二つに分割してしまうかくの如き相続方法が現実的なものであるとは時政も考えてはいなかったはずである。時政の眞の狙いは、一幡が家督を継承した後、これを外祖父として後見しようと考えていた比企能員を挑発することにあった。姻族の多い比企一族に対しては、時政も簡単には手を出せなかったが、策略をめぐらし比企派の有力御家人安達景盛（比企尼の孫）を自らの陣営に引き入れることに成功した時政は、ついに比企一族の追い落としにかかったのである（『吾妻鏡』には、頼家と安達景盛が女性問題でその関係を冷え切らせ、政子が仲裁に入った話を載せるが、この事件の背後には時政がいたはずである）。この揺さぶりにより、たとえ挙兵までには至らなくとも親頼家派が何らかの行動を起こすことを時政は見越していたのである。それを口実として比企一族を核とする頼家派を一掃してしまおうというのが時政の狙いであった。時政の術中にはまった比企一族は、軍勢を整える前に謀叛のかどで討伐される。比企氏の一族は一幡のいた小御所に籠もって応戦したが、多勢に無勢で同年九月二日、一幡とともに皆殺しにされてしまう。頼家は、九月五日に一幡および比企能員の死を知り、時政誅殺を命ずるが時すでに遅く、逆に捕らえられ、そのおよそ一ヶ月後には伊豆修善寺に幽閉されてしまう。頼家の動きは時政側につつぬけであった。頼家を監視する為に時政は、政所別当の大江山と頼家近習の一人中野能成をも籠絡しておいたのである。とくに大江広元を自らの陣営に引き入れることに成功した点は大きかった。広元は当時、將軍家の家政機関を束ねる立場にあり、その言動には影響力があった。時政と政子は、広元を執拗に説き伏せ、実朝の擁立を認めさせたのである。時政は、頼家に気づかれない様に京へ使者を派

遣し、「頼家が病死し、嫡子一幡も討たれたので、実朝を征夷大將軍に任命してもらいたい」と申し入れており（『猪熊関白記』）、このクーデターが周到に計画されたものであったことを知るのである。

時政は、比企氏の乱を経て、政治の表舞台に登場する。同年九月十日、実朝を政子郎から自邸の名越邸に迎え入れて時政はこれを見送った。同年九月十五日、実朝を従五位下征夷大將軍とする宣旨が鎌倉にもたらされ、同年十月九日には將軍家政所の吉書始が行われた。時政は大江広元と並んで晴れて政所別当のポストに就任した。時政にとって初めての政務機関の長への就任であった。いちおう二人の長官（別当）が並び立つ形であったが、重要なことは時政一人が署名する幕府文書（「関東下文」「関東下知状」「関東御教書」）によって下達されており、権力の所在は明らかであった。

時政は遠江国の国守、伊豆・駿河両国の守護職をつとめていたが、さらに比企氏姻族の島津忠久から薩摩国守護職を取り上げて、己のものとしていた。また武蔵国の有力豪族であった比企氏を滅亡させたことで、関東御分国（鎌倉殿が知行国主）の一つである武蔵国の経営にも時政は関心を持ち始めていた。その事は同年十月二十七日に、実朝が武蔵国の御家人達に対して、時政にふたごころを抱くことのないよう、侍所別当の和田義盛を通じて命じていることから窺えよう。知行国主の政務機関の長官として国務に携わろうとしたのか、あるいは京都守護として在京していた当国国守平賀朝雅の国衙行政権を代行したものなのかはわからないが、時政が武蔵国に触手を伸ばした事は疑いない。しかし、武蔵国には特殊な事情があった。武蔵国には、留守所を統括する惣検校職という役職が置かれていた。管内の武士団を直接掌握していたのは国守ではなく惣検校職であった。したがって国守が国務を遂行する為には惣検校の協力が不可欠であった。国守平賀朝雅のもと、惣検校職を勤めたのは、秩父氏の家督、畠山重忠であった。こ

北条時政の主たる妻子



* 牧ノ方以前の妻は前妻として一括した。伊東裕親女以外で知られているのは、時房の母、足立遠元女である。

の二人は共に時政の娘婿であったが、主導権をめぐり対立することが多かったのではなからうか。

時政は、比企氏を滅ぼした余勢をもって一気に武蔵国を勢力下におこうと考えたが、それには人心を掌握している惣検校職の畠山重忠の存在が邪魔となつたのであろう。元久二（一二〇五）年六月時政は、国守平賀朝雅との不和を口実に畠山重忠・重保父子を誅滅してしまう。

ところが、畠山氏を追討したことによって時政は急転直下、奈落の底へ突き落とされることになる。得意の絶頂にあった時政にしてみれば、まさかこの事件によって、足下をすくわれることになるとは思わなかつたはずである。しかもその首謀者は、前妻の子、政子と義時であったのである。

長女政子は、常日頃から時政の後妻牧ノ方との折り合いが悪く、しかも我が子実朝の後見役である時政夫婦に取り上げられてしまっていたので、時政夫妻に対して不満を募らせていた。そんな中、実朝の婚姻問題が、政子と牧ノ方の関係を一層悪化させることになった。実朝の嫁選びについて政子は、同腹の妹を母とする足利義兼の娘を推

挙し、これにはほぼ決定していたのであるが、後妻牧ノ方の横やりが入ったことにより、元久元（二二〇四）年八月、前大納言坊門信清の娘に突如変更されたしまったのである。牧ノ方は自分と縁故のある坊門家の娘こそ相応しいと時政を説き伏せたのであろう（この娘は娘婿である坊門忠清の妹である）。坊門信清は、時の治天の君、後鳥羽院の実母七



北条時政の墓（願成就院）

条院の弟で、二人の女子を後鳥羽の後宮にいれ、さらに二人の女子を順徳の後宮に入れる程の実力者であったから、時政自身が、坊門家との縁組みの方が利があると考えた結果かもしれないが、政子にしてみれば、前妻の子供達に対する時政の非情な仕打ちと映ったに違いない。

弟の義時も同じような不満を募らせていた。前述した様に、時政は後妻牧ノ方との間に生まれた政範を嫡子として溺愛し、前妻の子義時を遠ざけてきた。時政・義時親子の両者の間に如何なる確執があったのかは不明であるが、後妻の存在が大きかったことは間違いないだろう。幸い頼朝が、時政を牽制する為に義時を側近としたので、御家人としての面目を得ることはできたが、父時政には、庶子家の当主としてしか扱われなかった。それでも義時は父の命に従い、その後も行動を共にしてきたのであるが、ついに義時の堪忍袋の緒が切れるときがやってくる。元久元（二二〇四）年十一月、宗家嫡子の政範が、在京中に頓死する。これによって自分に宗家嫡子の座が回ってくると思っていた矢先、時政は予想

外の行動に出る。子の義時ではなく、孫である義時の次男朝時を宗家に迎えようとしたのである。朝時は泰時の弟ではあったが、正室である比企朝宗の娘を母とする第一子であったので、本来であれば義時の嫡子として跡を継ぐべき身だった。しかし時政によって画策された比企氏の乱の為、義時は、心ならずも比企氏の娘を離縁せざるを得なくなり、その子朝時も廢嫡せざるを得なかったのである。ところがその要因を作った時政が、その朝時を宗家に迎えようというのだから、義時もこれには我慢がならなかったはずである。時政にしてみれば比企氏の乱の戦後処理により、比企朝宗の遺領や守護職（加賀・能登・越中）等を引き継いでいる朝時こそ、宗家を継がせるのに相応しいと考えたのであろう。義時は、姉政子と連携をとりながら、父時政を失脚させる機会を窺うことにした。

そんな折、時政が人望のある畠山重忠の誅殺を企んでいることを知る。畠山重忠の妻は、政子の妹であり、時政はまたしても前妻の子供達を犠牲にしようとしていたのである。政子と義時は、これぞ好機と立ち上がる。義時は常の如く父の命に従い畠山氏討伐軍に加わったが、鎌倉に帰ると、この謀叛が牧ノ方の娘婿稲毛重成の捏造であったことを声高に主張し、兵を進め稲毛一族を討ち取ってしまう。またそれと同時に、平賀朝雅の讒言を真に受けた牧ノ方が黒幕であるとの風聞を流すことも義時は忘れなかった。ついに時政―牧ノ方陣営の切り崩しにかかったのである。そしてそのおよそ一ヶ月後の閏七月十九日、娘婿である平賀朝雅を將軍に据えようという牧ノ方の陰謀が露見したとして、義時は有無も言わず時政夫婦のもとから実朝の身柄を奪いとってしまう。この鮮やかなクーデターにより、時政は失脚する。義時は都にいる平賀朝雅を誅殺したのをはじめ、牧ノ方のもう一人の娘婿、宇都宮頼綱の「謀叛」を追求するなど、牧ノ方与党を表舞台から引きずり下ろし、幕府政治は政子―義時体制に移行することになる。藤原定家はその日記『明月記』（閏七月二十六日条）に「時政の嫡男義時が時政に背き、將軍実朝の母子と同心して、継母の

党を滅ぼした」とほぼその真相を記している。

クーデター当日に出家に追い込まれた時政は、翌二十日、伊豆国北条への隠居を強いられた。義時、政子の見事な手並みに、時政はほくそ笑んでいたかもしれない。建保三（一二二五）年一月、隠棲先の北条の地で時政は七十八歳の生涯を終える。

参考文献

池谷初恵『鎌倉幕府草創の地―伊豆・韭山の中世遺跡群―』（新泉社、二〇一〇年）

石井 進『日本の歴史7 鎌倉幕府』『文庫版』（中央公論社、一九七四年）

同『比企一族と信濃、そして北陸道』（石井進著作集第五卷）所収、岩波書店、二〇〇五年）

今井雅晴『北条時政の信仰（上）（下）』（『仏教史研究』第29巻第2号・第30巻第1号、一九六一・一九六二年）

小野眞一『裏方將軍北条時政』（叢文社、二〇〇〇年）

岡田精一『武蔵国留守所検校職に就いて―北条執権政治体制成立史の一齣―』（『学習院史学』第11号、一九七四年）

河合正治『北条時政』（安田元久篇『鎌倉將軍執権列伝』所収、秋田書店、一九七四年）

菊池紳一『北条時政発給文書について―その立場と権限―』（『学習院史学』第19号、一九八二年）

佐藤進一『増補鎌倉幕府守護制度の研究―諸国守護沿革考証編―』（東京大学出版会、一九七一年）

同『日本の中世国家』（岩波書店、一九八三年）

白根靖大『中条家文書所収「桓武平氏諸流系図」の基礎的研究』（人間田宣夫編『東北中世史の研究 下巻』所収、高志書院、二〇〇五年）

杉橋隆夫『富士川合戦の前提―申斐路・鉢田―合戦考―』（『立命館文学』第五〇九号、一九八八年）

同『牧ノ方の出身と政治的位置―池禅尼と頼朝と―』（上横手雅敬監修『古代・中世の政治と文化』所収、思文閣出版、一九九四年）

関 幸彦『日本氏リブレット人〇二九 北条時政と北条政子』（山川出版社、二〇〇九年）

鎌倉北条氏列伝（二）北条時政（長又）

鎌倉北条氏列伝（一） 北条時政（長又）

永井 晋 『鎌倉幕府の転換点―『吾妻鏡』を読み直す―』（日本放送出版協会、二〇〇〇年）

野口 実 『伊豆北条氏の周辺―時政を評価するための覚書―』（京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第20号、二〇〇七年）

同 『北条時政の上洛』（京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第25号、二〇一二年）

同 『「京武者」の東国進出とその本拠地について―大井・品川氏と北条氏を中心に―』（京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第19号、二〇〇六年）

原 茂光 『伊豆韭山「北条氏邸跡」発掘調査の成果と課題』（『日本史研究』四一三、一九九七年）

細川重男・本郷和人 『北条得宗家成立試論』（『東京大学史料編纂所研究紀要』第十一号、二〇〇一年）

三浦周公 『新編 歴史と人物』『文庫版』（岩波書店、一九九〇年）

村井章介 『中世の国家と在地社会』（校倉書房、二〇〇五年）

森 幸夫 『伊豆守吉田経房と在庁官人北条時政』（『季刊ぐんしよ』再刊第8号、一九九〇年）

安田元久 『武蔵の武士団―その成立と故地をさぐる』（有隣堂書店、一九八四年）